

季刊誌 神奈川芸術劇場

モノ・人・まちをつくる創造型劇場KAATの広報紙

ひらかれた
劇場へ。

KAAT PAPER

特集 芸術は、越えていく

春夏
2022



対談 篠山紀信(写真家)×長塚圭史(KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督)

- 「越境」で演劇は、広く、深く、豊かになる
- 長塚圭史の思いつき
- REVIEW
- 今日はKAATに何しにきたの？
- 神奈川へ、会いに〈横浜かをり〉
- 公演スケジュール
- 撮影=篠山紀信

対談

写真家

KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督

篠山紀信 × 長塚圭史

時代の変化と共に歩み・写す巨匠の軽やかな「越境」

『十八代目中村勘三郎写真集』を始め、数多くの舞台や俳優たちを撮り続ける写真家の篠山紀信さん。

舞台を撮り続ける意味や、これまで目撃してきた「越境」の瞬間を、長塚芸術監督と語り合います。

取材・文=尾上そら 写真=五十嵐一晴



二人の出会いと「演劇を撮る」ということ

長塚 篠山さんに久々にお会いできて嬉しいです。

篠山 確かに久々で、しかもKAATのホール舞台上という光栄な場所にお招きいただいたけれど、僕に話せることなんかあるかな？

長塚 もちろんですよ！ここは舞台芸術の関係者や演劇に興味のある方にはよく知られた劇場ですし、自主制作での年間公演数も非常に多い。でも所在地である神奈川県はとても広い自治体で、県の西側に住む方々など、まだKAATに触れていただけていない県民の皆さんもたくさんいらっしゃるんです。だから劇場や舞台芸術への入り口を増やしてKAATを知っていただくため、昨年僕が芸術監督になってから、広報誌の内容も色々変えていて。篠山さんのようにジャンルの異なるアーティストや、学者の方などにもお声がけしてお話を伺うようにしているんです。

篠山 異ジャンル枠で呼んでくれたんだ（笑）。出会ってから結構経つけれど、アナタ、留学したり芸術監督になったり、どんどん偉くなっていますね。

長塚 （笑）別に偉いわけではないですよ、芸術監督は。

篠山 最初の頃に観た芝居なんか、舞台上に本物のトラックがドーンと突っ込んで来て、あれはサイコーだったけど、偉くなるにつれて「真面目な芝居をしなきゃ」とか思い始めちゃったんじゃないかなあって。

長塚 阿佐ヶ谷スパイダースの『はたらくおとこ』（2004年初演）ですね。一番最初は02年の『ポルノ』を観てくださったんですよね。

篠山 若い世代の小劇場演劇なんか観たことなかったんだけど、僕は当時、小島聖さんの写真集がつくりたくて。自分の考えをしっかり持った人だから、まずは彼女の仕事をちゃんと観なければ調べたら、長塚さんの劇団公演に出ていたんですよ。小島さんの魅力もちゃんと引き出されていて、彼女に話を聞いたら「長塚さんは大した人なんだ」と言われ、以来長塚さんの公演は可能な限り観るようにしてきたんです。

長塚 同世代の演劇や演劇人を撮る機会はなかったんですね？

篠山 写真を撮り始めた頃に、早稲田小劇場（鈴木忠志、別役実らが1966年に結成した劇団）の稽古場は撮影を行ったことがあるよ。看板女優の白石加代子さんの、イイ写真が撮れたんだけど。その稽古中、剣道着で竹刀を持った男が舞台の花道みたいなところから走り出で来て、白石さんにワーッと文句を言うシーンがあってすごく面白かった。でも本番を観に行ったらその場面がなくて、「なんでなくなったの？」と訊いたら「あれは演出・鈴木のダメ出しです」って（長塚爆笑）。後は唐十郎の状況劇場にも行った。

長塚 当時すごく人気があったんですよね？

篠山 というか、カメラマンの間で「モダンジャズを聴き、アングラ演劇を観ないと写真が上手くならない」という伝説が、まことしやかに囁かれていたんですよ。当時はセロニアス・モンクなどジャズの巨匠が日々来日していた頃。あとも

つくりました。神奈川県内を巡演しましたが、これはありがたいことにウケました。結構、演劇的には尖ったこともしているんですが。

篠山 ちゃんと伝わったでしょ？

長塚 そうなんです。県知事もご覧になられて「ぜひ続けて欲しい」とおっしゃっていました。ご当地の名所・名物が出てくる場面は驚くほど反応が良くて。

篠山 オリンピックのプレ事業で、野田秀樹さんが総監修をやっていた「東京キャラバン」が同じ発想なんだよね。各地にアーティストを派遣して、地域の郷土芸能や祭礼、それぞれの文化と人材を取り入れたクロスオーバーなショウを構成し国内を巡るというもの。感染症禍のため、志半ばになってしまったけれど、でも非常に意義のあるもので観客の舞台芸術の経験値などに関係なく楽しめるものになっていたと思う。そういう創作や地域を回っての公演の大切さに、長塚さんが気づいたところはエライ！（盛大に拍手）。

長塚 ありがとうございます。

篠山 そういう、現地に出かけて人や題材と出会い、自分の肉体に取り込んで作品化していく過程はとても重要だし、幅広い地域と人に舞台芸術やアートを繋げていくためにも必要なことだと思いますよ、私は。

急激に変わりゆく時代を撮り続ける「宿命」

長塚 今回のKAAT PAPERのテーマが「越境」で、紀信さんはジャンルや世代、流行、国境などあらゆる境界を越えて来た越境者だと思うんです。中でも、先ほど名前の出たNoismの作品などでは、舞台上に篠山さん自身も一緒に上がり、進行する作品に入り込んで撮影していますよね？ 究極の「越境」ではないかと思うのですが、あれはどういう発想がもとにあるのでしょうか。

篠山 一番最初に「舞台に上がって撮りたい！」という衝動を感じたのは、さっき話した早稲田小劇場の稽古場だね。でも竹刀で叩かれたらカメラが壊れると思って引いたけど（笑）、鈴木さんが自分の芝居に対してグワーッと熱が燃えた時は、芝居の虚と現実の境目がなくなり、観ているほうも感動する。「これはスゲエな」と。そんな熱の渦の中に入ったら、見えるものも違うと思うでしょう？ で、気づいたら身体が動いてしまう、ということですよ。アナタは俳優もやるからわかるんじゃないかな、この感覚。

長塚 わかります。

篠山 Noismはカメラ越しに観ていても、段々近づいていきたくなるし、最後は踊りたくなってくる。NODA・MAPの舞台稽古なんかも同じで、最初こそびっくりする人もいるけれど、すぐ皆さん「あ、篠山は舞台に上がって撮るんだ」と飲み込んでくれて。もちろん、上ってはいけない舞台もあるけれど。

長塚 それはどういう作品ですか？

篠山 歌舞伎はいけないものもある。長く撮り続けている（坂東）玉三郎さんは、舞台稽古は「上がっていい」と言うけれど、全部が全部OKってわけではないね。あと歌舞伎は観客がいる時といい時では舞台上の役者の心意気がまったく変わるものだから、本番しか撮らない。でも、「舞台に上がって一緒に踊らなければ撮れない」とまで思われたのはNoismかな。NODA・MAPは、撮影用のライトを入れると役者がイイ表情、イイ芝居を見せてくれたりするんです。だから段々、舞台上に芝居をして撮る機会が増えていったというところはあるね。それを野田さんは許してくれた。

長塚 僕が演出した芝居ではハロルド・ピンターの『背信』（14年）を、舞台上で撮っていましたが、撮影している紀信さんの気配がまったく気にならなかったのがすごいなと思って。

篠山 よけるのと消えるのが上手なんだよ、ダンサーだってひよいひよいですよ。一度もぶつかったことがない。（長塚笑）



篠山紀信

写真家。1940年東京生まれ。日本大学藝術学部写真学科在学中に広告写真家協会展APA賞受賞。広告製作会社「ライトパブリシティ」を経て、68年より写真家として活動。66年東京国立近代美術館「現代写真の10人」展に最年少で参加。76年にはヴェネツィア・ビエンナーレ日本館の代表作家に選出される。71年より『明星』の表紙を担当して以降、時代を牽引する存在となる。2020年第68回菊池賞など受賞歴多数。

長塚 海外に対してはどうなんですか？僕は08年からイギリスに一年間留学していて、その時は、それまで自分が劇団でつくり続けていた芝居について煮詰まつたりもしていて、心の休息と充電の両方を外国に求めたところがあつたんです。紀信さんにとっての海外は、どういう場所なんですか？

篠山 カメラマンは海外に行かなくちゃダメ。全て体験し、体感しないと写真は撮れないんですよ。例えば僕は東京生まれの東京育ちで、「海」と言われて思い浮かぶのはせいぜい江の島。駆け出しの頃、「海でヌードを撮ろう」と思い立ち、モデルを連れて三浦半島の海岸に行ったんですよ。その写真をカメラ雑誌の編集者に見せたら「お前は海を知らない、本物の海を見たことがないだろう」と言われて、ハッとした。さらに「本気でカメラマンになるなら、透明な海で強い太陽に灼かれて痛い思いして撮った写真を持って来い」と突き返され、一念発起してバイトで資金をため、徳之島に一週間、モデル5人のロケ隊ごと行って撮影したのがコレ（取材当日に篠山氏の着衣にプリントされていた1968年の作品「birth」）ですよ。

長塚 この作品カッコいいよなあ！

篠山 当時はまだ沖縄が復帰していない、国内線で行ける一番南の島だったんだけど、飛行機を降りたとたんに空気も日差しも海の美しさも何もかもがあまりに違い、「モデルが裸ならオレも裸だ！」と脱いで撮影して（長塚爆笑）。翌日は全身やけどの状態で休みましたよ（苦笑）。そこから「行かなきやわからん！」の精神で、世界中に出かけていくことになる。リオのカーニバルを撮った「オレレ・オララ」（71年）は、4日間町中が踊り続ける中での撮影で、通りを渡りたくても踊る人波に遮られてしまう。でも、踊りながら飛び込んでいたら通りも渡れるし撮影もできた。そんな体験全てが、僕の写真になっているんです。もちろん頭の中で構図やイメージをつくり込む、観念的なカメラマンもいるけれど、僕のような肉体派はその場に行き、現象や行為にまみれて撮らないとダメなんだよね。

長塚 東日本大震災の時も、紀信さんは直後から東北に入って撮り始めましたよね？

篠山 ああいう時こそ迷わずに行かなければダメですよ。新聞など報道の、他人の撮った写真からは何も得られない、僕みたいなタイプはね。

長塚 なるほど、それこそが篠山紀信の「越境」なんだ！お話を伺いながら、ガツンと腑に落ちました。南海の島も南米の祭りも、震災の被害を受けた土地も全て体感しなければ納得できないし、その先にしかご自身の写真、クリエーションはないんですね。去年、東京都写真美術館で「新・晴れた日 篠山紀信」という写真展をされましたよね？

篠山 75年に「晴れた日」という写真集を出しているんだけど、その続き、60年間撮り続けた写真を、それこそジャンルを越境して編んだ展覧会だね。

長塚 あの美術館のフロアに昭和と平成が丸ごと、凝縮して詰め込まれたようで衝撃を受けました。どうしたら、あんな風に時代と並走できるんですか？

篠山 僕の場合は、「家の寺は兄が継ぐから将来は好きにしろ」と放任されて。時代的にも戦争が終わった焼け野原に始まり、高度経済成長をまんまと体験しながら育っていたわけだ。で、食べていくため仕事として写真を始めたものの、報道や芸術だけではない、広告分野での写真の需要がどんどん高まっていく時期でもあって。ものすごいスピードで激しく変わる時代を生き、それを撮影するという、どこか宿命じみた時代との関係性があるかも知れないね。

長塚 とても、この場では伺い切れない続いていることがあります。それはまた機会を変えないと、でしょうか。今日は貴重なお話をありがとうございました。



長塚圭史

REVIEW

『アルトゥロ・ウイの興隆』

2021年11月14日(日) - 12月3日(金)
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉



『横浜国際舞台芸術ミーティング 2021 (YPAM2021)』

2021年12月1日(水) - 19日(日)

劇団態変が 体現する時間

文=島貫泰介(美術ライター/編集者)

作:ベルトルト・ブレヒト
演出:白井晃
音楽:オーサカ=モノレール
振付:Ruu
出演:草彅剛
松尾諭、渡部豪太、
神保悟志、小林勝也
榎木孝明

そこで何が起きたのか、 客席で体感する熱狂のからくり

文=田中伸子(演劇ジャーナリスト)

劇作家・演出家ベルトルト・ブレヒトがヒトラー率いるナチスの迫害から逃れ、亡命先で執筆した「アルトゥロ・ウイの興隆(1941)」。そこで作家は急伸する独裁者=ヒトラーの姿をシカゴのギャング、ウイになぞらえ母國の民に対し状況を客観視するよう、アラートを発した。

今回、演出家白井晃は今日の観客に対し、20世紀を代表する劇作家の言葉を通じどんなメッセージを届けようとしたのだろうか。

一般市民の熱狂がその独裁者の台頭を援護、熱狂の渦の中で彼らは容易に理性を失ったのだという



撮影=田中伸子

事を観客たちに身をもって体感してもらうということに他ならない。

そのために必要不可欠だったのが、主役ウイを演じた草彅剛の圧倒的なスター性と観客を陶酔させるステージで名高いジェームス・ブラウンの音楽をライブで歌い、地団駄を踏むオーサカ=モノレール、中田亮のパフォーマンスだ。

目の前で繰り広げられる華やかなステージングに誰がおとなしくなんてしているやうか—ニュルンベルクでのナチス党大会壇上のヒトラーに歓喜の声をあげた人々のように。

白井の狙いは確実に果たされ、そしてバトンは客席側へと渡された。熱狂の後で考えるのは私たち。過ちを未来へ活かすのも私たちだ。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

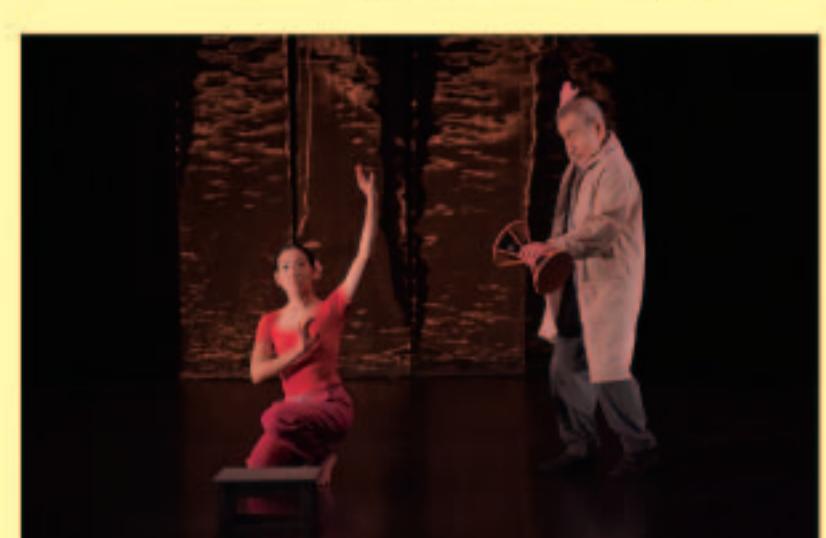
多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した綾維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスタイル:Aurore Thibout & Ysabel de Maisonneuve)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたら、顔を拭ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な『綾の鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笠田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執念といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸感が持続していく、彼女を恨む気も寂寥感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笠田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾の鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娘捨』の老女の靈が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやなかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。

演出・振付・出演:伊藤郁女、笠田ヨシ
テキスト:ジャン=クロード・カリエール
音楽:矢吹誠
演奏・出演:吉見亮(SPAC)



©Y. Inokuma

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した綾維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスタイル:Aurore Thibout & Ysabel de Maisonneuve)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたら、顔を拭ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な『綾の鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笠田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執念といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸感が持続していく、彼女を恨む気も寂寥感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笠田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾の鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娘捨』の老女の靈が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやなかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した綾維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスタイル:Aurore Thibout & Ysabel de Maisonneuve)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたら、顔を拭ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な『綾の鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笠田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執念といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸感が持続していく、彼女を恨む気も寂寥感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笠田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾の鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娘捨』の老女の靈が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやなかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した綾維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスタイル:Aurore Thibout & Ysabel de Maisonneuve)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたら、顔を拭ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な『綾の鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笠田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執念といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸感が持続していく、彼女を恨む気も寂寥感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笠田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾の鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娘捨』の老女の靈が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやなかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した綾維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスタイル:Aurore Thibout & Ysabel de Maisonneuve)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたら、顔を拭ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な『綾の鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笠田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執念といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸感が持続していく、彼女を恨む気も寂寥感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笠田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾の鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娘捨』の老女の靈が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやなかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した綾維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスタイル:Aurore Thibout & Ysabel de Maisonneuve)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたら、顔を拭ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な『綾の鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笠田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執念といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸感が持続していく、彼女を恨む気も寂寥感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笠田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾の鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娘捨』の老女の靈が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやなかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した綾維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスタイル:Aurore Thibout & Ysabel de Maisonneuve)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたら、顔を拭ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な『綾の鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笠田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執念といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸感が持続していく、彼女を恨む気も寂寥感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笠田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾の鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娘捨』の老女の靈が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやなかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金) - 26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

多幸感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反

長塚圭史の思いつき

これからの新しいKAATを探るなら、そのヒントは長塚芸術監督の頭の中にあるはず。そこで、「長塚さん、最近どうですか?」と、今ほんやりと考えていることを聞いてみました。



「越境する芸術」という特集テーマが決まり、真っ先に思い浮かんだのが、写真家の篠山紀信さんです。篠山さんは写真を撮ることで、あらゆる領域を「越境」をしていく存在です。昨年、東京都写真美術館で開催された「新・晴れた日 篠山紀信」展では、ポートレイト、広告写真、東日本大震災の被災地の風景など、60年以上に渡る篠山さんの作品が展示されていました。それはまさに、昭和と平成の時代そのものでした。そして、篠山さんは、被写体と写真の境を越え、響きあい、インスピアイし合いながら、新たなエネルギーを獲得し続けているのではないかと感じたのです。

総合芸術と呼ばれる「パフォーミングアーツ」は、さまざまな要素が絡み合い、ジャンルをクロスオーバーし、その輪を広げながら発展を続けています。400年以上の歴史をもつ歌舞伎は、話題の事件や文化を題材に、過去と現在を照らし合わせながら、「今」を演目を取り込んできました。だからこそ「古典」という枠に収まらずに、マンガなどの現代日本カルチャーと融合した新しい歌舞伎が生まれているのだと思います。一方で「新劇」の流れを汲む「演劇」は、まだ歴史が浅く、「今」に新しい出会いを求めるのと同時に、過去を振り返り、古典に立ち返ることで新しい何かをつかめることができます。そうやって「越境」し続けることで、舞台芸術が活性化していくのではないかでしょうか。この「KAAT PAPER」を手に取る方にとっても、これがひとつの新しい出会いになりますように。

※ご意見・ご感想をぜひツイッター・インスタグラムに「#kaatpaper」を付けて投稿してください。もしくはkouhou03@kanagawa-af.orgまでメールをお願いいたします。

今日はKAATに何しに来たの?

観劇やアート鑑賞、街散策など、さまざまな目的でたくさんの人が集まるKAAT。そこで、春のある1日、KAATを訪れた人たちに「今日は何しに?」と声をかけてみました。

共通質問

Q1 今日は何をしにKAATに来ましたか? Q2 お住まいは近所ですか?
Q3 KAATにはよく来ますか? Q4 KAATのことはどこで知りましたか?
Q5 KAATの好きなところは何ですか?

Q1 友人が『象』の演出を手掛けているので、それを観にきました。Q2 都内に住んでいます。
Q3 今回が初めてです。Q4 仕事でこのあたりに来たり、近くでライブを観ることがあって、存在は知っていました。Q5 KAATで友達が演出した作品が上演できることが嬉しいし、この周辺も歴史があってKAATの建築も素敵ですね。



Q1 『シェイクスピア物語～真実の愛～』を観にきました。Q2 都内から。
Q3 初めてです。Q4 名前は知っていたので興味があって。今回は会場がKAATだから観にきました。Q5 ダンスの公演もたくさんあるのがいいですね。また観に来たいと思います。



Q1 山下公園に遊びに来ました。NHK横浜放送局の隣にKAATがあったので、立ち寄ってみました。Q2 大和市と座間市です。Q3 KAATになってからは初めてです。Q4 ここに劇場があるということは聞いたことがあります。

KAAT 公演スケジュール 2022 SPRING / SUMMER

5月1日(日) - 6月5日(日)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines	アトリウム
5月1日(日) - 6月5日(日)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 山本卓卓『オブジェクト・ストーリー』	アトリウム
5月1日(日) - 5月8日(日)	ROTH BART BARON "HOWL" at KAAT ~LIVE SHOW & 360° IMMERSIVE SOUND DESIGN~	大スタジオ
5月6日(金) - 5月8日(日)	DaBY / SandD 小尻健太+森永泰弘『ころり』	中スタジオ
5月7日(土)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 ケダゴロ『「セ월」クリエーション・ドキュメンタリー』	アトリウム
5月11日(水) - 5月15日(日)	五大路子 ひとり芝居 『横浜ローザ 赤い靴の娼婦の伝説』	大スタジオ
5月13日(金) - 5月14日(土)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 近藤良平『新世界 solo』	アトリウム
5月20日(金) - 5月21日(土)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 小尻健太『Study for Self/portrait 2022』	アトリウム
5月21日(土) - 8月7日(日)	劇団四季 ミュージカル『ノートルダムの鐘』	ホール
5月26日(木) - 5月29日(日)	ケダゴロ『セ월』	大スタジオ
6月17日(金) - 7月3日(日)	CATプロデュース『テーパスランド』	大スタジオ
6月24日(金) - 6月26日(日)	月刊『根本宗子』『新しい試み』	小スタジオ
7月20日(水) - 7月24日(日)	KAAT キッズ・プログラム 2022 『ククノチ テクテク マナツノ ボウケン』	大スタジオ
8月11日(木・祝) - 8月21日(日)	KAAT キッズ・プログラム 2022 『さいごの1つ前』	大スタジオ

※情報は5月2日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
<https://www.kaat.jp>

- みなとみらい線: 渋谷駅から東横線直通で35分! 横浜駅から6分! 日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
- JR根岸線: 関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄: 関内駅から徒歩14分。
- 市営バス: 芸術劇場・NHK前すぐ。横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分) 桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分) ※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。ただし、148系統急行線を除く。
- 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用下さい。

指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団

KAAT神奈川芸術劇場では新型コロナウイルス感染症拡大予防対策を徹底し公演を実施します。ご来場前に必ず、劇場HPの「ご来場のお客様へのお願い」をご確認ください。

